



患者の治療につながる研究を続けたいと語る小泉教授(京田辺市・同志社大京田辺キャンパス) | 撮影・山本陽平

抗生物質の副作用などによって起こる「ステイプルス・ジョンソン症候群」や化学薬品による外傷など、従来の角膜移植では治せない患者の視力を回復させることだった。

「患者には若い人たちも

探究人

多い。ぜひ治せるようにしたい」。子宮の中で胎児を包んでいる羊膜には、炎症を抑えたり、角膜上皮の修復を促したりする働きがあることが分かってきていた。動物実験での試行錯誤

を重ね、羊膜の上で角膜上皮の幹細胞を培養し、羊膜と一緒に移植する方法の実用化にこぎ着けた。

内皮点眼薬治療も視野 より多くの人を助けたい

「移植手術を受けて目が見えるようになった患者さんが、診察室で倒れそうになるくらい喜んでくれた」。この体験が、今も研究を続ける原動力だ。「患者の治療につながる研究は素晴らしいと思った」と振り返る。

「臨床か研究か。両方を一流のレベルで続けるのは難しい」。2000年に大学院を修了した時、その後の進路で悩んだ。既に結婚して子どももいる。導き出した答えは「患者とのつながりを持ち続けながら研究する」。眼科医の夫とともに

に2年余りのドイツ留学を経て府立医大に戻り、03年から同志社大再生医療研究センターの助教授になった。10年には生命医科学部教授に就任し、工学と生命科学を学ぶ学生の教育と研究指導に取り組む。一方で、今も府立医大付属病院で眼科医として診療を続ける。

研究者の心

(松尾浩道)

大人や世間の常識にとらわれずに、自分が本当に好きなこと、大切なと思うことに挑戦していただきたい。能力の限界を決めるのは、親や先生ではなく皆さん自身です。



臨床応用を目指す角膜内皮細胞の培養を指導する(京田辺市・同志社大京田辺キャンパス)

角膜再生医療で世界をリード

黒目の表面を覆う角膜上皮を、シート状に培養してまると移植する画期的な治療法を1999年に臨床応用した。現在は「再生しないのが常識」とされる角膜内皮の再生医療に取り組み、これらの分野で世界をリードする。

「人を助ける仕事があったい」。医師として活躍する両親の姿を見て育った。京都府立医科大(京都市上京区)に進学し、女子学生の恒例行事「女子コンバ」に招かれた恩師の木下茂教授に出会う。「ぜひ女性にも活躍してほしい。Be international! (国際的であれ)」との言葉に共感し、木下教授が率いる眼科学教室に入局した。

府立医大での2年間の臨床研修を経て、大学院生として研究を始める。テーマは、再生医学の手法を用いた新しい角膜移植の開発。